

Title	石痴の話：『聊齋志異』 「石清虚」賞析
Sub Title	Stone lover in Liaozhai Zhiyi
Author	八木, 章好(Yagi, Akiyoshi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2004
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.87, (2004. 12) ,p.216- 234
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	岡晴夫教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00870001-0216

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

石痴の話

——『聊齋志異』「石清虚」賞析

八木 章好

一

「石清虚」は、清・蒲松齡の『聊齋志異』卷八に収録されている石マニアの話である。古來石に関する怪異の記録は数多く、その類型も千差万別である。小説の世界でも、『西遊記』の孫悟空は花果山山頂の仙石が裂けて生まれ出た石猿であり、『紅樓夢』（別名「石頭記」）の賈宝玉は女媧が天の補修に使い残した石が俗界に降りた者という設定になっている。石は民間伝承や文学創作のさまざまな場面に登場し、多くの場合、ある種の靈力を宿した存在として現れる。

また一方、石は古くから人々の愛玩の対象となってきた。とりわけ唐代以降、士大夫の間で賞石が一種の文人趣味として盛んになり、著名な文人では白居易・蘇軾・黄庭堅らが名石・奇石を詩に歌い文に記している。書家の米芾は石にまつわる数々の逸話をのこしており、また杜綰の『雲林石譜』をはじめ石に関する専門書も数多く編まれている。石を収蔵し賞玩する行為は、単なる嗜好や消遣に止まるものではなく、石の置かれた空間に「象外之象」、「景外之景」を見

いだし、そこに乾坤を感得し、さらには人と自然が融合して心を通わせる「天人合一」に到達せんとする審美的・哲理的行為であり、極めて芸術性・思想性の強い精神文化を背景としている。

「石清虚」は、こうした石に関わるさまざまな故事逸話や賞石における伝統的な精神文化を土台とし、さらに「痴」や「癖」がもてはやされた明末清初の特異な時代思潮を反映させて描かれた興味深い一篇である。

二一

「石清虚」は、不思議な石をめぐる男の身に起こる幾つもの事件を塗り重ねて構成されている。物語の梗概は以下の通り。

石マニアの邢雲飛が川で珍しい石を拾った。石にはたくさんの穴が開いており、雨の降る前には穴に雲が湧き起こる。権勢家がこの石に目を付け強奪しようとするが、下僕が誤って石を川に落とし、のちに石は再び邢に拾われる。ある日、老人が訪ねてきて、石は代々自分の家に伝わる物だから返して欲しいと言う。石に刻まれた「清虚天石供」の文字が証拠となつて、石は元々老人の物であったことが明らかになるが、老人は邢の哀願を受け入れ、石を譲り与える。その際、老人は邢の寿命を三年縮めることを条件とし、全部で九十二個ある穴のうち三つを指で捻りつぶした。一年余りして、石は泥棒に盗まれるが、数年後に報国寺で売られているのを邢が見つke、再び石を取り戻す。のち、大臣が邢の石を百両の大金で買い上げようとやってきた。邢がこれを拒むと、大臣は冤罪をでっち上げて邢を拘禁したので、邢の妻と息子は保釈金の代わりに石を大臣に差し出してしまふ。それを知つた邢は妻を罵り子を殴り、何度も自殺を図る。ある夜、石清虚と名乗る男が邢の夢枕に立ち、一年後の再会を予

言する。やがて、大臣が亡くなり、邢が夢の中の男と約束した場所に赴くと、果たしてそこに石が売りに出されており、邢はまた石を買い取って持ち帰る。邢は八十九歳になると自ら死装束を整えた。死去すると、息子は遺言通り、邢を石と一緒に埋葬した。半年後、墓が盗賊にあげられ、石が持ち去られる。盗賊はすぐに捕まるが、取り調べの役人が石を我が物にしようとし、下役が倉庫に納めようと持ち上げると、石は地面に落ちて粉々に砕けてしまう。邢の息子は石のかげらを拾い集め、元通り墓に埋めた。

石を手に入れては奪われ、奪われてはまた取り戻すという繰り返しを最後まで続けることによって主人公の境遇に大小の波瀾を与えながら物語は進行する。邢雲飛の巡り会った石は、愛玩物としての石ではない。靈妙な力と自らの意志を持った存在として、邢雲飛と共に物語の主役を担っている。

作品の冒頭で邢雲飛が石と出会う場面は次のようにある。

邢雲飛、順天人。好石、見佳石、不斬重直。偶漁於河、有物挂網、沈而取之、則石徑尺、四面玲瓏、峰巒疊秀。

邢雲飛は順天府の人である。石を好み、よい石を見ると大金を惜しまずに買い入れた。たまたま川で漁をしていて、何かが網に引っ掛かったので、水に潜って拾い上げてみると、直径一尺ほどの石であった。どこから見ても玲瓏として美しく、峰々が打ち重なる見事な山容を呈していた。

『聊齋志異』における人間と異類の出会いにはある定型が認められる。人間の男はそのものに対する尋常を超えた執着を示し、異類の精はそれを感じて男の前に姿を現し浪漫を展開する。「黃英」(巻七)の主人公馬子才は「世好菊、至才尤甚。聞有佳種、必購入之、千里不憚(代々の菊好きであったが、子才ときてはまた甚だしい。よい種類があると聞くと必ず買い求め、千里の道も厭わなかった)」とあるが、邢雲飛の石に対するマニアックな嗜好は、この馬子才の菊

に対するそれとよく似ている。また、異類の精との出会いは必然的なものでありながら、表面上は常に偶然のこととして描かれる。「葛巾」（巻七）では、主人公常用は「適以他事如曹（たまたま別の用事で曹州に赴き）」、そこで牡丹の精葛巾と巡り会うが、邢雲飛もやはり漁をして網を張った際に偶然石と出会う。こうした類似点は、「石清虚」が人間と石とのドラマではありながら、広い意味では、花妖などを扱った異類譚と同じ範疇に属する物語であることを示唆する。人間が人間以外のものと関わりを持って浪漫を展開する点では菊花や牡丹の異類譚と基本的に同じ趣向の作品であると言つてよい。

さて、邢雲飛が手に入れた石の形状に注目してみよう。石の大きさは差し渡し一尺余り、その姿は玲瓏として美しく、峰が幾層にも連なつてそそり立つかの如き秀逸な姿をしている。また、下文に老人のセリフで、「前後九十二竅（前後合わせて九十二個の穴が開いている）」とあり、石の表面には数多くの空洞ができてゐる。こうした描写から推察すると、この石は太湖石であると特定することができる。石印本『詳註聊齋志異図詠』の絵図（図版1）においても明らかに太湖石として描かれている。

太湖石とは、太湖（江蘇省・浙江省）一帯から産出する石灰質の岩石をいい、明・謝肇淛『五雜俎』



図版 1 『詳註聊齋志異図詠』

地部に、

洞庭西山出太湖石、黒質白理、高逾尋丈、峰巒窟穴、贖有天然之致。

洞庭西山（太湖にある島の名）に太湖石を産出し、黒い岩肌に白いすじが通り、高さは八尺を超える。その形は山の峰々の如くであり、洞窟のような穴があり、自然の風趣に溢れている。

とあるように、連山を象つたような全体の形状と表面にできた空洞の存在がその魅力とされる。空洞の形成については、宋・范成大『太湖石志』に、「因波濤激齧而成嵌空（波に打たれて空洞が生じる）」などあり、長い歳月にわたる波浪の浸食によるものとされる。明・文震亨『長物志』卷三に、太湖石について、「石在水中者爲貴、歳久爲波濤冲擊、皆成空石、面面玲瓏。在山上者名旱石、枯而不潤（石は水中のものがよく、年月を経て波に打たれると、どれも穴の開いた石になり、どこから見ても玲瓏として美しい。山上のものは旱石と呼び、干涸らびて潤沢でない）」とあるように、水中から産するものが好まれる。水的作用は穴を穿つばかりでなく、粗い岩肌を玉のように滑らかで光沢を帯びたものに変えていく。こうして、自然の風趣を備えた太湖石独特の姿が出来上がるのである。「石清虚」において石が水辺で拾われるのも、こうした太湖石と水、或いは波との関わりによるものと考えてよからう。

太湖石の形態美は、しばしば「瘦」、「皴」、「漏」、「透」の四字によつて品評されるが、後二者の「漏」は穴の開いた形状をいい、「透」は透き通つたような質感をいう。「玲瓏」は、元来玉の清く澄んだ音色を表す擬音語であるが、視覚的にも玉が透き通るように明るく鮮やかなさまをいう。玉のみならず、珊瑚や太湖石などの冴えた美しさをいうのにもしばしば用いられる。作品冒頭の石の形容は、こうした太湖石に対する古来の審美観に基づくものである。

太湖石は、古くから宮廷および官僚や文人の間で珍重された。唐・白居易の「太湖石」詩に、

嵌空華陽洞

嵌空なり華陽の洞

重疊匡山岑

重疊す匡山の岑

とあるように、その形状は打ち重なる山々とその奥にひそむ洞窟を連想させる。道教でいう「十大洞天」、「三十六洞天」などの別天地は、洞窟から着想を得たものである。洞天説の発生に関しては、東晋の頃、太湖一帯で道教の一派が活動していたことから、太湖石の存在が直接的に発想上のヒントを与えたとされる。太湖石は自然景観のミニチュアであること以上に、道教的な宇宙空間を具現するものであり、三浦国雄氏の述べるように、「中国の士大夫たちは、大きなものは庭に、小さなものは机辺に置くことによって、峨々たる山岳や幽邃な巖穴に思いを馳せるとともに、みずからの日常生活を洞天化しようとした」のである。

「石清虚」の石が太湖石であれば、そこには自ずと道教的な世界のイメージの広がりを得ることになる。作品では、大きな穴の一つに「清虚天石供」の五文字が刻まれているとあるが、ここでいう「清虚天」とは、道教の洞天、すなわち仙境の一つを指す。この石は、元々そこに置かれていた飾り物であったということになる。

また、穴というものが本来的に持っている神秘的なイメージも、作品に少なからぬ演出効果を与えている。民間伝承や志怪小説において、穴は常に別世界への入り口であり、その先に広がるのは、「桃花源記」のような別天地であったり、「枕中記」のような夢幻の王国であったりする。「石清虚」の石の場合も、ただ綺麗で珍奇な物体として登場するのではなく、そこに多くの空洞が開いていることによって、神秘的な異次元のイメージが醸し出され、一つの小宇宙のような存在として読者の前に呈示されるのである。

さらに、「石清虚」の場合、穴が怪異現象を生じ、それがこの石をより一層特異ならしめている。石を手に入れた邢

雲飛は、紫檀で台座を刻み机上に飾っておいた。すると、

毎値天欲雨、則孔孔生雲、遙望如塞新絮。

雨が降りそうになると、どの穴からも雲が湧き起こり、遠くから眺めると真つ白い綿を詰めたかのようなだった。というように、天候によつて雲を生じるといふ不思議な現象を起こす。

石は、古来民間伝承の上で天候と密接な關係を持つと考えられている。いわゆる「陰陽晴雨石」の話では、陰の石を打つと雨が降り、陽の石を打つと晴れるとされる。石に水をかけたり、泥を塗つたり、或いは生け贄の血を塗つたりして雨を降らせるといふように、石が雨乞いの対象となる話は数多い。また、雲が水蒸氣から成ることを知らない古代人は、雲は山奥の岩石の間や洞窟の中から生成されると信じており、詩語で岩石を「雲根」というのは、岩や石を雲の生ずる根源とする發想からであり、晋・陶淵明「歸去來兮辭」に「雲無心以出岫、鳥倦飛而知還（雲は無心にして以て岫を出で、鳥は飛ぶに倦みて還るを知る）」とあるのも、雲が山中の洞穴から生じるとする考えに由来する。石にまつわる伝説・逸話の中でも、毎日未の刻になると決まつて空洞から煙雲のような氣を生じるといふ「未石」の話や、雨が降ろうとすると龍池がしつとり潤うといふ「宝晋齋研山」の話などは、いずれも雲や雨との関わりの上で「石清虚」の石と大変よく似ている。先に挙げた白居易「太湖石」詩にも、

未秋已瑟瑟 未だ秋ならざるに已に瑟瑟

欲雨先沈沈 雨ふらんと欲して先ず沈沈

という詩句が見られ、やはり石と天候の関わりを示している。

このように、石（とりわけ穴の開いた石、或いは洞窟）と、雲そして雨とは、民間信仰の上で一つの線で繋がるもの

である。「石清虚」において、雨の前に石の空洞から雲を生じるといふ怪異現象の記述は明らかにこうした伝説や逸話を土台としたものであり、それらを巧みに取り込みながら作品の雰囲気作りが行われている。主人公の名前が邢雲飛というのも決して任意の命名ではない。ちなみに、蘇州の「冠雲峰」や「瑞雲峰」など天下の名石に数えられる太湖石の多くはその名称に「雲」の字を含む。

三

「石清虚」の主題、或いは文学作品としての面白味の所在とでも言い換えた方がよいかもしれないが、それは石そのものにあるわけではなく、男と石との間に交わされる「情」にある。「情」は、明清の小説・戯曲で中心的に取り上げられたテーマであり、『聊齋志異』においても、異性に対する凝り固まった情、すなわち痴情や、特定の物に対するマニアックな嗜好、すなわち癖を描いた一群の作品がある。⑨。「石清虚」もこの類の作品であり、情痴を描いた「阿宝」(巻二)、「連城」(巻二)、花痴を描いた「葛巾」(巻七)、「香玉」(巻八)などと並んで、「石清虚」は石痴を描いたものである。

邢雲飛の石に対する異常な執着のさまは作品の随所に見られるが、その最たるものが、石と終始生活を共にせんがために少しも躊躇することなく自分の寿命を三年縮めるといふくだりである。正に石のために生き、石のために死すのである。このように、ある一つの物事を直線的、盲目的に追い求めるが故に常軌を逸した行動に奔るのは、痴の人間に共通して見られる特性であり、『聊齋志異』の中でも、「阿宝」の主人公孫子楚が惚れた女の戯れを真に受けて斧で指を断ち切ったり、「葛巾」の主人公常用が女の調査した毒薬をそれと知りつつあえて飲んでしまったというように、

自らの肉体や生命の犠牲を厭わない。こうした世俗の目には甚だ愚かしく映る行為の裏に作者蒲松齡が描こうとしたものは、彼らの一途で正直な性格、世俗の臭味のない純朴な人間像であった。

『聊齋志異』の中にこのような痴、或いは癖といった性格を持つ男たちが数多く登場するのは、明末清初の時代思潮と無関係ではない。¹⁰「痴」も「癖」も元来は負価の意味の言葉であるが、これらが諸々の既成の価値観が揺らいだ明末清初の時代思潮の中で正価の意味を以て解釈されるようになる。こうした傾向は、明清の小品文に最も端的に見ることが出来る。例えば、清・張潮の『幽夢影』に、

情必近於癡而始眞、才必兼乎趣而始化。

情は痴に近くてはじめて本物になり、才は趣を兼ねて始めて立派なものになる。

花不可以無蝶、山不可以無泉、石不可以無苔、水不可以無藻、喬木不可以無蘿、人不可以無癖。

花には蝶がなくてはならず、山には泉がなくてはならず、石には苔がなくてはならず、水には藻がなくてはならず、喬木には蘿がなくてはならないように、人には癖がなくてはならない。

というように、痴や癖を持った人間を肯定的に標榜する価値観を示している。元来は惑溺耽迷の愚行、玩物喪志の悪習として否定的に評価される性癖が『聊齋志異』において純真な人間像として肯定的に描かれるのは、こうした明末清初の時代思潮を経てきているからに他ならない。そして、『石清虚』では、道士の老人の言葉で、

天下之寶、當與愛惜之人。

天下の至宝は、それを愛惜する者に与えられるべきだ。

とあるように、ただ執着するのではなく、愛惜の情が肝心であるとし、さらに但明倫の評語で、

一日傾心、終身不改、所視者、愛之專與不專、惜之至與不至耳。

ひとたび心を傾けたら、生涯改めることがない。そうした態度に示されるのは、愛する情が専一のものであるかどうか、惜しむ情が至上のものであるかどうかだ。

と言うように、愛惜の姿勢にも条件があり、「専」であり「至」であるというように、徹底した最大限の情でなければならぬとしている。

四

歴代の文人に石痴で知られる者は数多いが、なかでも宋の米芾が名高い。「石清虚」においても、馮鎮巒の評語に、

南宮石丈人、具袍笏而拜、想無此品。牛奇章號爲好事、諒亦未嘗見此。

米芾は礼装して奇石を拜んだというが、こんな代物はなかつただろう。牛僧孺は好事家と言われるが、これほどのものは見たこともないだろう。

と言及されている。米芾（字は元章）は、礼部員外郎の官職に就いたので米南宮とも称し、奇怪な言動が多かつたので米顛と呼ばれた。無為軍の長官となり赴任した際、役所の巨大な奇石を見て、袍笏（朝廷に出仕する礼装）を身に着けて拜み、「石丈」（石の爺さま）と呼んだという「米顛拜石」の逸話はよく知られる。（図版2）

「石清虚」の作品自体には米芾の故事を明白に典故とした字句は見られないが、蒲松齡がこの作品を執筆するに当たって、彼の脳裏に米芾のイメージが存在したであろうことは容易に推察できる。蒲松齡の編年詩集『聊齋詩集』を見る

と、康熙十一年（蒲松齡三十三歳）に「和畢盛鉅石隱園雜詠」と題する十六首連作の五言絶句があり、その第二首「万

笏山」に、

參差衆峰出

參差として衆峰出で

萬竅鳴天籟

萬竅 天籟鳴る

若遇米南宮

若し米南宮に遇わば

僕僕不勝拜

僕僕として拝するに勝えざらん

とある。また晩年の康熙四十七年（六十九歳）には「石丈」と題する七言古詩があり、その末尾の二句は、

我具衣冠爲瞻拜

我衣冠を具えて為に瞻拜し

爽氣入抱瘞沈疴

爽氣抱に入りて沈疴瘞ゆ

と詠っている。石隱園は蒲松齡の郷里に近い畢氏宅の園林の名であり、蒲松齡が館師（住み込みの秘書兼家庭教師）としてその半生の歳月を過ごした場所である。そこに置かれていた石、或いは築山を蒲松齡は米芾の逸話にちなんで詠っている。蒲松齡が実生活の上で日々目にしてきたこの石こそが、「石清虚」の石のモデルとも考えられるのである。

石を愛した歴代の文人たちの中にあつて、米芾を特異な存在たらしめているのは、彼の石に対する心情のあり方に他ならない。上に挙げた馮鎮巒の評語に米芾と並んで登場する唐の牛僧孺もまた石マニアとして知られるが、彼は収集した石を大きさによって甲乙丙丁の四種に分け、それぞれを上中下の三等にランク付けをして、石の裏に「牛氏石甲之上」などの文字を刻んだと言われる¹⁴。牛僧孺は宰相としての権勢を恃みに天下の名石を集めたコレクターであり、おそらく彼にとって石は藏品として所有し観賞する玩物以上のものではない。米芾の場合には、「米顛拜石」の故事が物



図版2 『米顛拜石図』（李可染画）

語るように、石を人として扱い、人に対する時と同じ情を以て石に相對する。この故事にはむろん米芾の性癖を際立たせるための誇張や虚構の要素が少なからず含まれていようが、いずれにしても、物が人の賞玩の対象としてあるのではなく、人と物とが同じレベルで向かい合う関係にある。前掲『幽夢影』に、

天下有一人知己、可以不恨。不獨人也、物亦有之。如菊以淵明爲知己、梅以和靖爲知己、竹以子猷爲知己、蓮以廉溪爲知己、(中略)石以米顛爲知己……

世の中に一人でも自分を理解してくれる者がいれば悔いはない。それは人ばかりでなく、物でもそうなのだ。菊は陶潜を知己とし、梅は林逋を知己とし、竹は王徽之を知己とし、蓮は周敦頤を知己とし、(中略)石は米芾を知己とし……

とあるように、特定の物の嗜好において、真にその物を愛したとされる文人については、人と物は互いに心を通じ合わせる知己の間柄にあるとされる。人が物を愛するばかりでなく、物もまた人を愛し、感性と理性を持った主体として人に働きかけるのである。そうした人と物との関係があつてこそはじめて、そこからさまざまな風趣に富んだ逸話や詩情豊かな物語が生まれうるのである。

康熙二十八年(五十歳)の「逃暑石隱園」と題する七言律詩に、

石丈猶堪文字友 せきじょう 猶もんじ とも
石丈 せきじょう 猶文字の友たるに堪え

薇花定結喜歡緣 びか 定めて 喜歡の縁を 結べり
薇花 びか 定めて喜歡の縁を結べり

とある。石隱園に置かれた石とその傍らに咲く花は、詩人蒲松齡の目にはただの石や花としては映らない。石とは互いに詩文を交わす友、花とは前世に縁を結んだ仲というように、同じ時空で対等の立場に立つて情を交わし合う相手であ

ることをこの詩は詠う。こうした物や異類に対する姿勢が『聊齋志異』の諸篇に色濃く表れており、それが筆致の温かさとなって読者に伝わり、他の志怪には見られない『聊齋志異』独自の文学的余韻を醸し出している。「石清虚」は正にそうした『聊齋志異』の特色を示す典型的な作品の一つなのである。

五

「石清虚」における情は、男の側から石に対する一方的なものではない。老人の言葉に「此石能自擇主（この石は自ら主を選ぶ）」とあるように、石にもまた自らの意志があり、情を以て情に報いるという物語構成になっている。石を略奪した大臣の邸宅では空洞から雲を生じる靈異現象を起こさないというのは、いわば沈黙による抵抗である。また、初めに権勢家によって男の元から強奪される際、表面上は下僕が橋の上で手を滑らせて川に落とすたと書かれているが、これは下僕の不注意によるものではなく、権勢家の所有物となることを拒む石自身の意志が働いた結果と読まなければいけない。さらに末尾の場面で、小役人の手から落ちて粉々に砕けたとあるが、これもやはり石が自ら身を投げて砕けたと解釈しなければならぬ。故意に自らを粉碎して無価値な物にすることによって俗物の手に落ちることを免れ、再び男の墓に戻り永遠に生死を共にしようとしたのである。いわば後追い自殺であり、男の情に報いるための最後の手段であった。論讚の「異史氏曰」にも、

至欲以身殉石、亦癡甚矣、而卒之石與人相終始、誰謂石無情哉。

身を以て石に殉じようとするに至っては、執着も甚だしい。しかし、ついには石が人と最後まで一緒になったのだから、石に情がないなどと誰が言えようか。

とある。

そもそも石という物体は、通常概念では、冷たく堅く動かないものであり、「鉄石心腸」、「木人石心」などの語が表すように、情とはおよそ縁のない存在であり、無情の象徴である。そうした本来情が通じないはずのものとの交情を描いている点が、この作品の面白さでもある。「異史氏曰」はさらに続けて、

古語云、士爲知己者死。非過也。石猶如此、何況於人。

昔の言葉に「士は己を知る者の為に死す」とあるが、言い過ぎではない。石ですらかくの如きなのだから、まして人間においてはなおさらだ。

と言う。「史記」「刺客列伝」に見られる豫讓の言葉を引いているが、ここでは、石の男に対する義侠心を言ったもので、何度強奪されても常に男の元へ戻ろうとし、最後には自ら碎けて墓の中にまで添い遂げたことを指している。「聊齋志異」の中には、「王六郎」(巻二)、「田七郎」(巻三)、「崔猛」(巻六)など、義侠心を描いた作品が少なくない。義侠は封建社会における一種の伝統的美徳であるが、しかし、これもある意味では、痴や癖と同様に、世俗の利口者の目から見れば、不器用で融通の利かない愚かな生き方と言えなくもない。そして、正にそれが故に、作者蒲松齡が共感を持って描いた人物像の一つであった。「連城」の「異史氏曰」に、

一笑之知、許之以身。世人或議其癡、彼田橫五百人、豈盡愚哉。

一笑してくれただけの知己に一身を捧げてしまう。世の人にはその痴なることを云々する者があるが、かの田橫の五百人がどうして尽く愚かであったろうか。

と述べているように、一本気で頑なな生き方を善しとし誉め讃えているのである。

なお、石はその堅さ故に無情を象徴すると同時にまた、わずかも動揺することのない節義や忠烈の心を象徴するものもある。白居易「青石」詩に、

義心如石屹不轉 ぎしん ぎしん 石の如く屹として転ばず

死節如石確不移 しせつ しせつ 石の如く確として移らず

とあり、また「石友」、「石交」などの語は、金石の如く堅固な朋友の情誼についていう。⁽¹⁵⁾「石清虚」においても、石が邢雲飛に対して示した義侠心、堅く変わることはない情誼は、こうした石の持つ伝統的なイメージをそのまま反映するものである。

しかしながら、また一方で、人との交情を描いたものとは言えど、この作品はあくまでも石の話であるので、石の描写においては狐妖や花妖の場合のような擬人化の手法はとられていない。宋・陸游の「閑居自述」に、

花如解笑還多事 はな はな 花 如し笑うを解せば還た事多からん

石不能言最可人 いし いし 石 言う能わずして最も人に可し

とあるように、石を愛でる人にとつて石の魅力は物言わぬ存在であることであり、「石清虚」においても石自らは語ることなく動くこともなく、首尾一貫して石の属性を守る筆法がとられている。石は石として描き人間の性格を一切賦与していないにもかかわらず、読者にはその石を頤る人間的に感じさせるところに作者の筆の妙をうかがわせる。

六

中国で近年出版されている選注本・評釈本の類における論評を概観すると、「石清虚」は旧社会における官僚の横

暴・卑劣を描いた作品であるとする見方が大半である。この作品では、さまざまな邪悪な力によつて幾度となく石が邢雲飛の元から奪われる。初めは権勢家によつて強奪され、次には泥棒の盗難に遭い、そして大臣によつて有らぬ罪を着せられ投獄された上で詐取され、最後には小役人の職権濫用で横領される。論者はこうした点に着目して、「権勢家は無理やり奪い、盗賊はこつそり奪う。役人は無理やり奪う必要もなければ、こつそり奪う必要もない。手中に権力を握っているから、思うままに無辜の民を陥れることができる。作者は巧妙に役人と盗賊と権勢家を交錯させて描写し、官はずなわち賊であり、賊よりも悪辣であるという本質を余すところなく暴露している」と評述する。「石清虚」を旧社会の暗黒面を暴露する現実批判の作品として捉え、そして正にそうした批判精神を持った作品であるが故に『聊齋志異』の中の優秀な作品の一つに数えている。

確かに、『聊齋志異』の中には、腐敗した官僚制度や理不尽な科挙制度などを風刺した作品が少なくない。幾つかの作品は、それ自身が作品の主要なテーマであり、そうした社会の悪弊を告発する意図を持って書かれている。しかし、多くの場合、世の中の醜悪な一面を描くのは、実はそのこと自体が作品の主たる目的ではなく、むしろ、それはそうした醜悪なものに染まつていない純真な人間を引き立てるための出汁だしとして副次的に描いているに過ぎないことがあり、「石清虚」もそうした作品の一つと考えてよい。邢雲飛と役人たちとは、同じ石に対する執着のあり方が根本的に異なる。役人たちの執着は金銭に対する「貪」や女色に対する「淫」と同質で、「痴」とは似て非なるものであり、蒲松齡はこれを「痴」とは呼ばない。彼らの態度をことさら醜悪に卑俗に描くことによつて、逆に邢雲飛の純真で一途なさまをより一層際立たせる効果を持たせているのである。

なお、この作品における役人たちの所業に関してさらに別の観点から言えば、書画や骨董のみならず、名石・奇石に

ついても権力者や好事家が所有欲を抑えきれずに強奪したり詐取したりという話は、実は文人の逸事を記した歴代の文獻に散見する。米芾に限ってみても、漣水軍に任官した際、賞石に夢中で官舎の書齋にこもってはかりいると監察官の楊傑がやってきて叱責し、「君ばかりでなく、私も好きなのだ」と言つて、米芾が愛玩していた石を奪つて立ち去つたという話、友人の薛紹彭が米芾の珍藏する硯山を持ち去り、薛の元へ訪ねていっても見せてもらえず、そこで筆を執つて硯山の想像図を画いて自らを慰めたという話などが伝わっている。石が何度も奪われるという「石清虚」の筋立ては、こうした石にまつわる数々の、時に文学的粉飾を伴つた逸話を下敷きとしたものとする見方も或いはできるかもしれない。

いずれにしても、邢雲飛が度重なる災難に遭うのは、その不条理を訴えるところに主眼があるのではない。それは、そうした試練を与えることによつて男の石に対する真摯な情を確かめるという演出に他ならない。一つの災難を経るごとに男の執着の度合いがさらに一層上塗りされ強調された形で読者の前に呈示され、一塊の石に殉じた男の痴たるさまが自ずと浮き彫りにされていく。そして、読者はそうした痴たるさまの中に、世俗の価値観とは一線を画す文人精神の発露を見いだすのである。その意味では、この物語のプロット全てが「痴」という一つのテーマに集約されると言つてよいのである。

- (1) 卷次は任篤行輯校『全校会註集評聊齋志異』(齊魯書社、二〇〇〇年)に拠る。「石清虛」は手稿本にはなく、底本は康熙鈔本を用いている。なお、張友鶴輯校『全校会注会評聊齋志異』(上海古籍出版社、一九六二年)では卷十一に収め、底本は鑄雪齋鈔本。
- (2) 同様の記載が、宋・杜綰撰『雲林石譜』の「太湖石」の項に「於石面遍多坳坎、蓋風浪衝激而成、謂彈子窩」、清・李斗撰『揚州画舫錄』卷七に「太湖石乃太湖中石骨、浪激波濤、年久孔穴自生、因在水中、殊難運致」などとある。
- (3) 「玲瓏」については、阿部兼也「玲瓏の語義」(『東北大学教養部紀要』四七、一九八七年)参照。
- (4) 珊瑚の例は、晋・左思の「呉都賦」に「珊瑚幽茂而玲瓏」などとある。太湖石の例は、明・徐弘祖撰『徐霞客遊記』「滇游日記四」に「石在亭前池中、高八尺、闊半之。玲瓏透漏、不瘦不肥、前後俱無斧鑿痕、太湖之絕品也」、清・李斗撰『揚州画舫錄』卷七に「乾隆辛巳、得太湖石九于江南。大者逾丈、小者及尋、玲瓏嵌空、竅穴千百」などとある。なお、上海の豫園に置かれている巨大な太湖石は「玉玲瓏」と名付けられている。
- (5) 三浦国雄「洞庭湖と洞庭山」(『中国人のトポス』平凡社、一九八八年)、一四一頁。
- (6) 後魏・酈道元撰『水經注』卷三七「夷水」の条に「夷水自裁沙渠入縣、西南上里餘、得石穴。把火行百許步、得二天石磧、並立穴中、相去一丈、俗名陰陽石。陰石常濕、陽石常燥。每水干不調、居民作威儀服飾、往入穴中。干則鞭陰石、應時雨。多雨則鞭陽石、俄而天晴」とある。陰陽晴雨石およびその他石にまつわる民間伝承については、澤田瑞穂『中國の伝承と説話』(研文出版、一九八八年)、「口碑拾遺」の章参照。
- (7) 宋・彭乘撰『続墨客揮犀』卷五に「李芬朝議好奇。有異石、高二尺許、嵌空可愛。嘗置庭欄間、每至日方未時、即有氣出於石穴中、若煙雲之狀、候之、萬不差一、因目之未石」とある。
- (8) 明・陶宗儀撰『輟耕錄』卷六に載せる「宝晋齋硯山図」に付した添え書きに拠る。前掲注5三浦論文、一三八頁。
- (9) 拙稿「聊齋志異」の痴について」(『藝文研究』第四八号、一九八六年)参照。
- (10) 前掲注9拙稿九一頁参照。
- (11) 方舒巖評にも、「覺米襄陽好書好畫、猶不獨石。即好御硯、好州磨石、好漣州靈瓏石、猶不一名、而雲飛自清虛天外無聞焉。其諸得一知己可以不恨者歟」とあり、やはり米芾に言及している。

- (12) 宋・葉夢得撰『石林燕語』卷十に「知無爲軍、初入州廨、見立石頗奇、喜曰、此足以當我拜。遂命左右取袍笏拜之、每呼曰石丈」とある。『宋史』卷四四四の本伝にもほぼ同様に「無爲州治有巨石、狀奇醜、芾見、大喜曰、此足以當我拜、具衣冠拜之、呼之爲兄」とある。宋・費袞撰『梁溪漫志』卷六は別の拜石の故事を載せ、「米元章守濡須、聞有怪石在河壩、莫知其所自來、人以爲異而不敢取、公命移至州治、爲燕遊之玩。石至至而驚、遽命設席、拜於庭下曰、吾欲見兄二十年矣」とある。
- (13) Zeitlin, Judith. *Historian of the strange: Pu Songling and the Chinese classical tale* (Stanford University Press, 1993) p.79-80 参照。
- (14) 『王狀元集註分類東坡先生詩』卷八「次韻滕大夫三首」其二に引く趙次公の注に拠る。池沢滋子「蘇軾の痴について」〔橄欖〕第八号、一九九九年）一一〇頁参照。
- (15) 方舒巖評にも、「不意燕地忽得奇峰疊秀、四面玲瓏者、與雲飛訂石交焉」とあり、「石交」の語が物語の内容に引っ掛けて用いられている。
- (16) 馬振方主編『聊齋志異評賞大成』（濰江出版社、一九九二年）より抄訳。「石清虚」の評語は劉烈茂氏。
- (17) それぞれ清・潘永因撰『宋稗類鈔』卷十五、明・陶宗儀撰『輟耕錄』卷六に見える。塘耕次『米芾』（大修館書店、一九九九年）二二三―二八頁参照。